

児の神経発達マイルストーンの到達におけるSGAの影響：HBC研究

著者	岩淵 俊樹, 西村 倫子, 野村 容子, 堀越 隆伸, 土屋 賢治, HBC Study Team
雑誌名	DOHaD研究
巻	8
号	3
ページ	51-51
発行年	2019
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003641

児の神経発達マイルストーンの到達における SGA の影響 : HBC 研究

岩渕俊樹^{1,2}、西村倫子^{1,2}、野村容子^{1,3}、堀越隆伸^{2,4}、土屋賢治^{1,2}、HBC Study Team¹

1. 浜松医科大学子どもこのころの発達研究センター、2. 大阪大学大学院連合小児発達学
研究科 (浜松校)、3. Queens College and Graduate Center, City University of New York、
4. 群馬大学大学院医学系研究科

【背景・目的】

Small for gestational age (SGA) 児の乳幼児期における運動機能や言語機能、認知機能、適応行動の発達には遅延が生ずるが、遅延に性差があるかどうかは分かっていない。本研究は SGA 児と非 SGA 児における発達マイルストーンへの到達月齢を、また発達マイルストーンへの到達が認知・適応行動を媒介するかを、性別ごとに検討した。

【対象・方法】

1219 名を対象とした。Fenton growth-chart に基づき出生体重 10 パーセント未満の児を SGA に、それ以外を非 SGA に分類した。マレン早期学習尺度を用いた発達マイルストーン到達月齢の評価 (1~40 ヶ月)、ヴァインランド適応行動尺度を用いた適応行動の評価 (40 ヶ月)、WPPSI 知能検査を用いた認知機能の評価 (50 ヶ月) を実施した。マイルストーン到達月齢について群間比較および生存分析を実施し、また SGA とマイルストーン到達月齢、認知・適応行動との関連について媒介分析を実施した。

【結果】

SGA 児 (299 名) は幾つかの発達マイルストーンにおいて到達月齢が遅れが見られ、なかでも女兒に特異的に遅れがみられる発達マイルストーンがあった。男女別に媒介分析を実施した結果、女兒では適応行動の全ドメイン (コミュニケーション、日常生活スキル、運動、社会性) に対し、SGA がマイルストーン到達月齢の遅れを介して悪影響を及ぼすことが示された。一方、男児では SGA の直接効果、間接効果はともに運動ドメインでのみ有意であった。

【結論】

SGA は、マイルストーン到達の遅れを部分的に介して、幼児期の適応行動に影響していた。SGA の女兒において、マイルストーン到達の遅れは、適応行動の発達遅延の予測に利用できる可能性が示された。